

音楽科鑑賞学習における可視化の効果

—図形楽譜づくり，物語づくりを用いて—

熊本大学・山崎浩隆

音楽鑑賞学習において知覚・感受を可視化し，聴き方・感じ方を豊かにすることを意図した実践に音楽の図形楽譜づくりを用いることが有効であることが明らかにされ，その方法を用いた実践研究が数多く報告されている。時間とともに消えてしまう音楽を色・形に変換することにより，聴き方・感じ方を可視化・固定化することができる。そのことによって音楽について，お互いの知覚・感受を話し合わせやすくなった。図形楽譜づくりと同様に可視化・固定化できる方法として物語づくりがある。図形楽譜で表現すること，そして物語で表現することは聴き方にどのような効果をもたらすのだろうか。本研究では，教科書会社が発行している指導書に基づいた実践と図形楽譜づくりを用いた実践，そして物語づくりを用いた実践を行い，子どもの書いた批評文の内容を比較した。その結果，批評文に記述された知覚・感受の数について三つの指導方法には統計的な有意差がないことがわかった。

キーワード：鑑賞／図形楽譜／物語／批評文／聴き方

はじめに

令和2年度に完全実施となる第9次小学校学習指導要領では鑑賞学習について，その内容の一つに「曲想及びその変化と，音楽の構造との関わりについて理解すること」が示され，曲想と音楽の構造の二つを相互に関連させること，そしてそのことによる鑑賞の学習の深まりが意図されている。知覚・感受の関わりを明確にするとともにその関わりを豊かにするような学習活動がより一層求められているのである。では，知覚・感受の関わりを豊かにするということはどのようなことなのか，学習指導要領に即して捉えておきたい。

1. 知覚・感受の関わり

第8次中学校学習指導要領において知覚・感受という言葉が用いられた¹⁾。解説では「音楽的な感受とは，音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ受することを意味する」と

示されている²⁾。この知覚・感受という言葉は，小学校学習指導要領においては「聴き取り」「感じ取る」という言葉に置き換えられている。

第9次中学校学習指導要領においても知覚と感受については第8次学習指導要領と同じ説明がされ，さらに「ここで言う『知覚』は，聴覚を中心とした感覚器官を通して音や音楽を判別し，意識することであり，『感受』は，音や音楽の特質や雰囲気などを感じ，受け入れることである」とされている³⁾。

以上のことから，本稿において「知覚・感受の関わりを豊かにする」とは以下の二つのこととして捉えることにする。

- (1) 速度や強弱などの音楽の各要素については学習活動後，より細かな違いに気付くとともにその違いに応じた特質や雰囲気を感じ取る。
- (2) 学習活動前に聴いた音楽の要素や要素同士の関連に加え，学習活動後それとは異なる

要素、要素同士の関連を聴き、そこから特質や雰囲気を感じ取る。

2. 知覚・感受の可視化

音楽に対して知覚・感受を豊かにするためには自分が持ち得なかった知覚の枠組みを獲得すること、つまり気付かなかった聴き方を知ることが必要である。そのためには、他者の聴き方、知覚の枠組みを知ることが必要であり、それが音楽鑑賞学習において「言語活動」が必要となる理由だと考える。しかし、音楽について「言語活動」を行うこと、すなわちお互いの聴き方・感じ方について意見を交わすことは、音楽をその対象とした場合、容易なことではない。音楽は不可視であり時間とともに聞こえなくなるからである。第8次学習指導要領において「言語活動」による学習活動が推進されたことから、鑑賞学習においてもそのことを実現するための方法として知覚・感受を可視化する指導法が重視されたり開発されたりしてきた。第8次学習指導要領が示される以前から行われている可視化の方法には、身体反応、身体表現がある⁴⁾。それ以外にも線を使って音楽を示したり楽器の音色を△や○などの記号を使って記録したりする方法も実践例として示されているため⁵⁾、それらが活用されていたことも考えられる。しかし、示されている実践例の多くは、「気付かせる」の文言が多く、聴いて確認させることが可視化することのねらいであったと考えられる。

3. 図形楽譜づくりによる可視化

第8次学習指導要領が示されて以降、鑑賞学習において知覚・感受を可視化することで話し合いを活性化させる授業づくりが盛んに行われるようになった。その中の一つに図形楽譜づくりを用いた小島・兼平の研究がある⁶⁾。この研究では図形楽譜づくりを用いることで、音楽の質的側面を意識すること、楽曲の部分間の関連性を意識すること、共感的コミュニケーション作用を活性化することの三つにおいて有効であることが示されている。時間とともに消えてし

まう音楽を色・形に変換することにより、聴き方・感じ方を可視化・固定化することができる。そのことによって音楽について検討するとともに、お互いの知覚・感受を話し合わせることで他者の聴き方・感じ方を知ることができるようになったと言えよう。

4. 物語づくりによる可視化

図形楽譜づくりと同様に可視化・固定化できる方法として物語づくりがある。教材曲を聴き、その音楽に即した物語をつくることで音楽をより主体的に聴くようにするものである⁷⁾。

子どもたちは、荒唐無稽な話が大好きである⁸⁾。そこで、音楽をもとに場所や登場人物を設定し物語をつくらせることにした。物語をつくることは、音楽を聴く意欲を高めるとともに文章に示した内容が音楽の聴き方を可視化・固定化することになる。そのことから音楽について話し合いが活性化され、音楽の聴き方・感じ方をより豊かにできるのではないかと考えた。

5. 先行研究

図形楽譜づくりを鑑賞に用いる実践研究は、先に示した研究が発表されて以降多く見られるようになったが、それらは抽出児童の観察、発言記録をもとに指導方法の特性を明らかにするものであり、授業に参加した学習者全員を対象にしたものは管見の限り見当たらない⁹⁾。

鑑賞学習における「物語づくり」「お話づくり」の先行研究には、清水・田代の模擬授業・事例報告¹⁰⁾および加藤による事例研究¹¹⁾がある。清水・田代は音楽をもとに個別につくらせたお話を、子ども同士で比べさせている。加藤はリボンを動かす活動の後にお話づくりの活動を行い、3人の児童に焦点をあてその探求過程を考察している。さらに、前田・青山は物語づくりを用いた実践を行い、その指導過程の中で知覚・感受の割合がどのように変化するのか、物語を個別につくらせることにどのような効果があるのかを考察している¹²⁾。

このように、図形を用いたもの、物語づくりを用いたもののいずれも、その探求過程を考察

するものであり、指導方法が知覚・感受を獲得させる上でどのような効果をもたらしたのかについて明らかにしたものではない。

6. 目的と方法

そこで、本稿では図形を用いることと物語づくりを用いることが知覚・感受の獲得にどのような効果をもたらすのかを明らかにすることを目的とする。

そのために統制群と実験群を設定し検討する。統制群として教科書会社が発行している指導書による指導を、実験群として図形楽譜づくりを用いた指導と物語づくりを用いた指導を行い、それぞれの学習の最後に教材曲を聴き子どもたちが書いた批評文について知覚・感受の記述について分析検討を行う。さらに、そのことが他の音楽の鑑賞にどのように関連するのかを調べるため、最後に別の曲を鑑賞させ批評文を書かせることにした。

7. 実践計画と指導の実際

実践で用いる教材曲は、グリーグ作曲〈「ペール・ギュント」第1組曲〉より《山の魔王の宮殿にて》とした。この曲は、主旋律が何度も反復するのだが、それを演奏する楽器、速度、強弱が変化する。また、それは音楽の後半部分に顕著になる。そのため「統一」と「変化」が分かりやすく音楽について思考したり議論したりすることができると考えたからである。またそのことを通して、より音楽を味わうことができるようになると考え設定した。

なおこの曲は、実践を行ったK市が採択している教育芸術社の教科書に、第4学年に教材として掲載されているため4年生を対象とした。

教材曲の学習後に別の曲として鑑賞させる曲は、チャイコフスキー作曲〈くるみ割り人形〉より《トレパーク》とした。この曲は《山の魔王の宮殿にて》と同様、反復が多用されているため《山の魔王の宮殿にて》で学習した聴き方を生かしながら、変化のある他の要素を聴くことができると考えたためである。

指導時数はいずれも2時間取り扱いであり、

実践は2019年2月18日～21日、K市T小学校4年1組、2組、4組を対象に学級ごとに指導書、図形楽譜づくり、物語づくりによる実践を行った。授業者はいずれも筆者である。

(1) 指導書による指導

教科書会社は各教科書に即した指導例をまとめた指導書を発行している。小学校では担任が音楽の授業をすることが多く、それを参考に授業を行う教員も多い。そこで、統制群として教科書会社が発行している指導書による指導を行うこととした。本稿では、研究実践を行う小学校が採択している教育芸術社のものを用いることにした。そこに示されている指導の流れは以下の通りである。

- ① はじめの部分を聴き、どんな感じがするか話し合う。
- ② 聴いて気付いたことや感じたことを発表する。
- ③ 楽曲全体を通して聴き、音楽の表す情景がどのように変化していくか、学級全体で話し合う。
- ④ 気付いたことや感じたことをワークシートにまとめる。

	はじめ	中	終わり
感じたこと	こわい あやしい のんびり歩いている ゆっくり	小鳥がいない 近づいている 歩くのが速くなる 急用を思い出した	見つけた こけた けがした 走っている ぜつぼう つかまった おどろいた
気づいたこと	ゆっくり	だんだん速くなる	速くなったり おそくなったり 耳にひびくほど 大きくなった はじめ・中より大きい
	小さい と中で大きな音 音が低い	高くなる	

図1 教科書指導書に即した実践における板書

さらにこの指導書には板書例、ワークシート記述例も示されている¹³⁾。そこで、実際の授業

でもこの例に即したワークシートを作成し、板書を行うようにした。

図1は、この授業で最終的に示した板書図である。これは子どもたちの発言を時間の経過、および音楽の要素ごとに指導者が整理したものである。教材曲の特徴をこの板書を通して確認したあと批評文を書かせた。

(2) 図形楽譜づくりを用いた指導

図形を用いた指導は、小島・兼平の研究を参照して行うようにした。

教材曲は六つの区切り〔1〕～〔6〕と番号を振り、音楽の流れに沿って大型テレビの画面に数字が表示するようにした。

指導の流れは以下の通りである。

- ① 〔1〕～〔6〕の欄のある各自のワークシートに、音楽を聴きながら主旋律が同じだと感じれば同じ色のシールを、変わったと感じれば異なる色のシールを貼る。
- ② グループになり、最初の主旋律について色と形を話し合っ決めて。
- ③ 決めた色と形、その理由を発表し合う。
- ④ グループごとに主旋律の色や形がどのように変化するかを話し合い、教材曲全体の図形楽譜をつくる。
- ⑤ つくった図形楽譜をグループごとに学級全体に向けて発表・説明する。

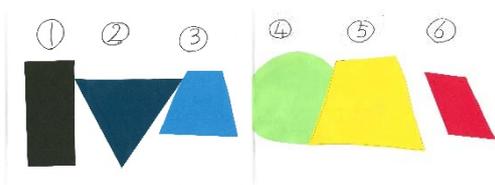


図2 子どもたちがつくった図形楽譜

図2は、あるグループの図形楽譜である。旋律がどのように変化していくのかについて話し合いながら色と形、大きさを決めていった。各グループの作品をお互いに発表したあと批評文を書かせた。

(3) 物語づくりを用いた指導

- ① 最初の17小節を聴かせ「思い浮かぶ場所」を決めさせる。
- ② 49小節目までを聴かせ、場所が変わったか否かを決めさせる。
- ③ 子どもたちの発言をもとに教材曲には変わるものと変わらないものがあることを確認する。
- ④ グループになり、教師が六つに区切った各部分ごとに聴かせながら物語づくりに取り組ませる。
- ⑤ つくった物語をグループごとに学級全体に向けて発表・説明する。

音楽に合わせて物語をつくらう

飛行機たっしつ物語

4

	音楽の特徴	物語
1 （節）	暗くて音が小さい	夜空を飛行機が飛ぶ。
2 （節）	少し明るくなり、音が少し大きくなった	テロリストにばくたんをしらけられる
3 （節）	リズムとともに、音が大きくなる	キャビンアテンダントがばくたんに負つて逃げてさうぼうへ行く
4 （節）	3の場面とほとんど変わらない	ばくはつするまで3分おん交あせている
5 （節）	音はげしくなり、リズムがものすごく速くなる	みんなにげるしびを冬冬たけだすじんびばんさふ
6 （節）	音が大きくなる	飛行機から全員たっしつつし、その後ばくはつする。

図3 子どもたちがつくった物語

図3は、あるグループがつくった物語である。物語をつくる学習シートは音楽の特徴をもとに物語を考えるように、音楽の特徴を記述する欄を左に設け、その記述をもとに物語づくりを進めるようにした。各グループの作品をお互いに発表したあと批評文を書かせた。

8. 結果

子どもたちが書いた批評文を読み、どの音楽の要素を知覚したのかを分類整理し、要素ごとに累積度数を算出した。また、感受についてはその記述の有無を確認した¹⁴⁾。

分類整理にあたっては、筆者の他、小学校での授業経験のある研究者の2名で分類の妥当性を検討した。

今回子どもたちが書いた批評文からわかるのはどの要素について聴き取ったかということだけであり、要素をどれだけ細かな尺度で聴き取ったかを把握することはできない。聴き取った要素の種類にのみ着目して分析検討を行うことにした。

記述の中に表れた要素は、リズム、速度、強弱、音色、音高、旋律、反復であった。

図4は《山の魔王の宮殿にて》についての批評文の記述に現れた要素の累積度数を示したものであり、図5は《トレパーク》について同様に示したものである。

各実践を行った学級の人数はいずれも29名と同数であった。

(1) 《山の魔王の宮殿にて》の批評文

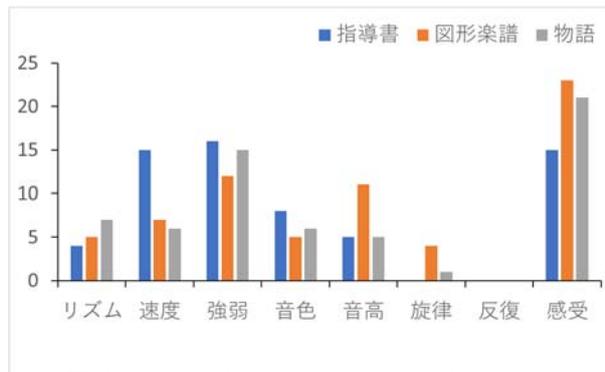


図4 《山の魔王の宮殿にて》の批評文に記述された要素ごとの累積度数

指導書、図形楽譜づくり、物語づくりの3群についてノンパラメトリック検定を行った結果、統計的な有意差は認められなかった。つまり、学習群として学習後に言語化された知覚・感受を見た場合、音楽鑑賞について指導法による違いは認められなかった。

(2) 《トレパーク》の批評文

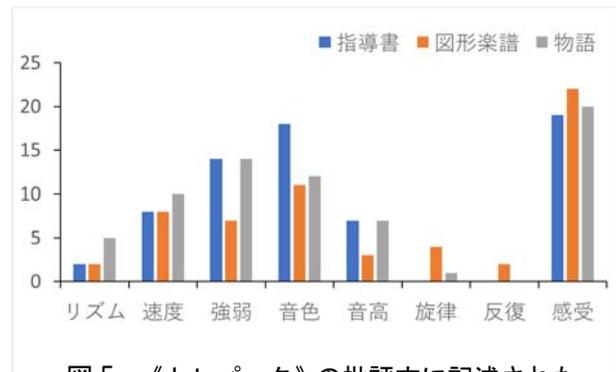


図5 《トレパーク》の批評文に記述された要素ごとの累積度数

《山の魔王の宮殿にて》と同様に指導書、図形楽譜づくり、物語づくりの3群についてノンパラメトリック検定を行った。その結果、こちらも統計的な有意差は認められなかった。

(3) 批評文に表れる要素の変化

次に、各実践において教材曲である《山の魔王の宮殿にて》の批評文と《トレパーク》の批評文に書かれた知覚・感受の要素の数の変化をしてみる。

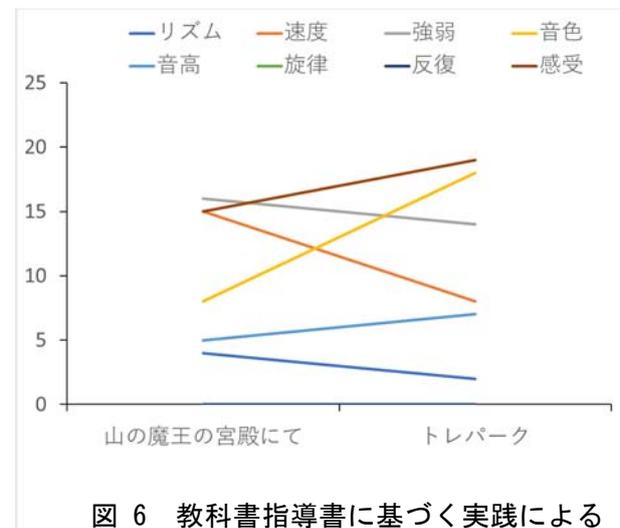


図6 教科書指導書に基づく実践による批評文に記述された要素ごとの累積度数の変化

図6は、教科書の指導書による実践を行った後、2曲それぞれについて子どもが書いた批評文に現れた要素の累積度数の変化を示したものである。以下、図7は図形楽譜づくりによる実践、図8は物語づくりによる実践によるもので

ある。

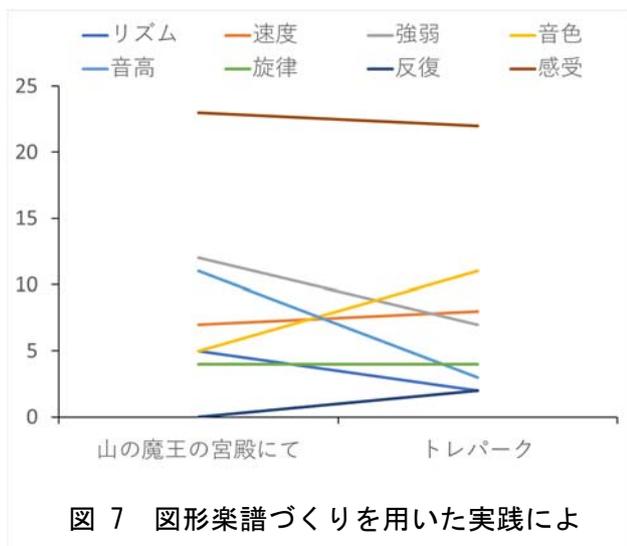


図7 図形楽譜づくりを用いた実践による批評文に記述された要素ごとの累積度数の変化

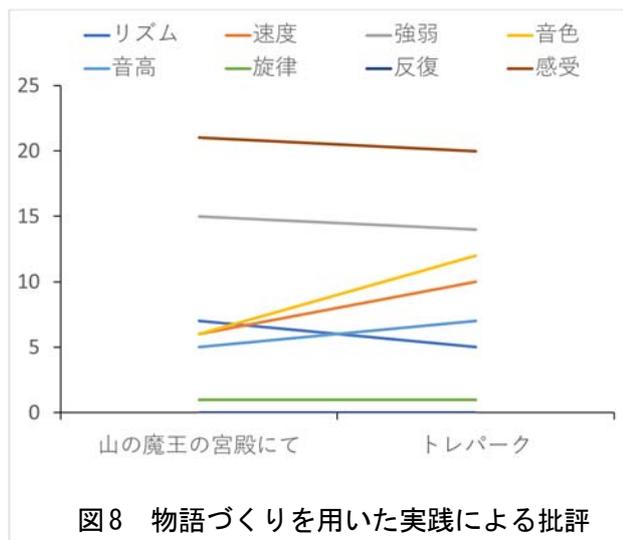


図8 物語づくりを用いた実践による批評文に記述された要素ごとの累積度数の変化

二つの曲の批評文に記述された要素ごとの累積度数の差を求め、指導書、図形楽譜づくり、物語づくりの3群についてノンパラメトリック検定を行った。その結果、統計的な有意差は認められなかった。

9. 考察

批評文に言葉として表現された知覚・感受の記述のみで検討した場合、三つの指導法には違

いがないことが明らかになった。

しかし、図4における感受の度数を比較すると指導書による実践に比べ、図形楽譜づくり、物語づくりを行った学級の方が多い。特に、図7を見ると図形楽譜づくりでは感受と知覚の度数の間に大きな差がある。物語づくりにおいてもその傾向が見られる。音楽に適合する色や形、そしてそれらの配置を検討したり、物語を検討したりする際、音楽の曲想や雰囲気を考えているためだと考えられる。

図6～8では《トレパーク》を鑑賞することで記述に増加した要素と減少した要素が見られる。表1はその要素を指導法別に示したものである。

	記述が増加した要素			記述が減少した要素		
指導書	音色	音高		速度	強弱	リズム
図形楽譜	音色	速度	旋律	音高	強弱	リズム
物語	音色	速度	音高		強弱	リズム

表1 批評文に記述された要素の指導方法ごとの変化

表1をみると、三つの指導方法で共通している要素がある。増加したのものには音色があり、減少したものは強弱とリズムである。音色が増加したのは批評文を書いた二つの曲で違いが聴き取りやすかったことが考えられる。また、減少したものは、《山の魔王の宮殿にて》に比べ《トレパーク》では強弱とリズムの変化を聴き取ることができなかったと考えられる。

一方、三つの指導方法で変化の異なる要素がある。図形楽譜づくりを用いた指導では旋律が増加し音高が減少している。旋律についての記述と判断したのは、「音を切っている」など表現の仕方、アーティキュレーションについての記述である。音楽を形で表す際、表現の仕方を聴き取ることが関連したものと考えられる。音高が減少していることについては、色が音楽の印象と対応しやすいが音高については対応しにくいことが考えられる。

さらに図6～8の中で最も傾きが大きいのは指導書による音色である。指導書では速度が減少しており、この減少は他の二つでは見られない。これは、批評文を書く授業の中でトランペ

ットの音が聞こえることにこだわる子がおり、何度もそのことを口にしていたことから、音色を聴き取る子どもが増えたのではないかと考える。音色に気をつける子どもが多くなったことから速度、リズム、強弱を聴く子どもが少なくなり、記述が減少したと考えられる。

このように見てみると、一斉授業を中心に進める教科書指導書による指導方法は特定の子どもの発言に左右されやすい傾向にあることが考えられる。そのことに対応するためには指導者が学習目標を明確にしておき、授業において子どもの発言をどのように取りあげ整理していくのか目標に沿って授業を進めていくことが大切になるだろう。

10. 今後の課題

図形楽譜づくり、物語づくりを用いた学習では、感受の記述が知覚の記述に比べはるかに多い。これは、先に述べたように曲想や雰囲気を考える必要があるからである。ここで物語づくりを用いる上で留意すべき点がある。図8のグラフからも明らかだが、感受の線と強弱の線がほぼ平行になっている。つまり、これらには相

関があることが考えられ、強弱を中心に物語づくりを行ったのではないかと推察される。強弱に着目させたい場合は、物語づくりを用いることが有効であるかもしれないが、他の要素に着目させたい場合は、他の方法がよいのかもしれない。このことは、教材曲によって着目する要素が異なるのかもしれない。今後、異なる曲を教材曲とした実践研究を行う必要がある。

物語づくりについては、もう一つ課題がある。音楽を聴かなくても物語をつくることができることである。物語づくりに意識が偏ってしまうと音楽から子どもたちの意識が離れてしまう。音楽から離れないようにするために学習シートの欄の順序を決めたのだが他にもそうならない手立てを講じることができれば、音楽を一層感じ取ることができようになるだろう。音楽鑑賞の学習として適切な学習活動になるような手立てを講じる必要がある。

本稿では検討しなかったが、知覚・感受の関わりを豊かにすることの一つに要素ごとの尺度をより細かくすることも考えられる。このことについても獲得の有無を明らかにできる方法を探りたい。

- 1) 平成20年 文部科学省『中学校学習指導要領』第2章 第5節 音楽 第2 各学年の目標及び内容 第1学年 2内容 [共通事項] (1)ア
- 2) 平成20年 文部科学省『中学校学習指導要領解説 音楽編』第2章 第2節 2 各領域及び [共通事項] の内容
- 3) 平成29年 文部科学省『中学校学習指導要領解説 音楽編』第2章 音楽科の目標及び内容 第2節 音楽科の内容 2各領域及び [共通事項] の内容 (3) [共通事項] の内容 ②知覚と感受との関わり
- 4) 昭和58年に文部省が著作した『小学校音楽指導資料 鑑賞の指導』では、具体的な指導例として身体反応、身体表現が挙げられている。また、平成27年発行の教科書『音楽のおくりもの3』教育出版においてもp.33に旋律の流れに合わせて手などを動かしながら聴くことが示されている。
- 5) 財団法人 音楽鑑賞教育振興会編 1991「ホルン協奏曲 第1番 二長調 第1楽章 [指導事例-3]」『音楽の鑑賞指導 小学校編』、

p.69.

- 6) 小島律子, 兼平佳枝 2010「音楽科鑑賞授業における『構成活動』としての『図形楽譜づくり』の教材性」日本学校音楽教育実践学会『学校音楽教育研究』, 14, pp.227-237
- 7) 山崎浩隆 2018「物語づくりを用いた鑑賞学習」日本学校音楽教育実践学会『学校音楽教育実践論集』, 2, pp.90-91.
- 8) 子どもたちが大好きな荒唐無稽な物語を代表するものは1980年に岩崎書店から出版された『はれときどきぶた』であろう。発行部数が発売以来150万部を超えていることから子どもたちがそのような物語を好んでいることが以下の記事からわかる。
田澤健一郎「小学生の読書感想文に『はれときどきぶた』が選ばれるワケ」2019『ダ・ヴィンチニュース』KADOKAWA
<https://ddnavi.com/review/547230/a/>
(2019年11月11日参照)
- 9) 小島律子 編著『子どもが活動する新しい鑑賞授業 音楽を聴いて図形で表現してみよう』2011 音楽之友社には、六つの実践事例が紹介

されている。また、日本学校音楽教育実践学会の機関誌『学校音楽教育実践論集』1および2にも図形楽譜づくりを用いた鑑賞学習の実践研究が掲載されているが、いずれも抽出児あるいは抽出グループについて考察したものである。

- 10) 清水匠, 田代若菜 2015 「IV だれもが主体的に取り組む鑑賞の授業《小学校》: (第2年次)-お話づくりを通して『友達と比べる』交流活動-」『学校音楽教育研究』, 日本学校音楽教育実践学会, 19, pp.98-103.
- 11) 加藤柚乃 2019 「音楽科鑑賞授業における探究的な学びの一考察:—お話づくりの活動の事例研究—」『学校音楽教育実践論集』, 日本学校音楽教育実践学会, 3, pp.43-44.
- 12) 前田裕作, 青山之典 2019 「音楽的な見方・考え方を養う音楽科指導過程の研究—音楽認知プロセスを手がかりにした音楽鑑賞を通して—」福岡教育大学『福岡教育大学大学院教職実践専攻年報』, 9, pp.105-112.
- 13) 小原光一他 2015 『小学生の音楽4 教師用

指導書 研究編』教育芸術社, p.97 に以下のように例が示されている。

〈板書例, ワークシート記述例〉

	始め	中	終わり
感じたこと	不気味	追いかけてくる	つかまりそう
	暗い森の中みたい		はげしい
気づいたこと	おそい 低音の楽器	だんだん 強くなる	とても速い とても強い
	せんりつを何度も くり返している		

- 14) 記述の確認について、「はじめ, 中, 終わり, 色々な速さや強弱→音の高さなどがバラバラでおもしろい曲だなと思いました。(ママ)」という子どもの記述を例にとると、「速さ」「強弱」「音の高さ」の語句があるため各々の要素としてカウントした。また、「おもしろい曲」という記述は「感受」に関するものとしてカウントした。